

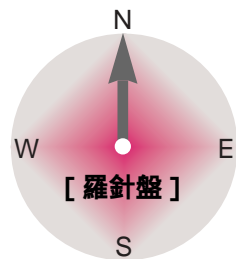
きらめきの地域デザイン

VOL.56 2006 MAY

# 琥珀い 石風

季刊●あおいかぜ  
特集／スポーツで熱くなれ!!





# 生活して楽しい町

倉敷商工会議所 会頭  
大原謙一郎



きた「コミュニティー」がまたいくつも生き残っている。東西のそういう地域に共通するのは、このまちで良質な生活を楽しみたいという、市民の強い思いである。生活して楽しい町をつくることは、同時に多くの人たちをひきつける。米国ニューヨーク州のロチェスターは人口約二十五万人の都市で、大学と市民が産業クラスター（産業集積）を形成していることと知られている。確かにロチェスター市にはイーストマン・コダック社をはじめとする世界的な企業の本社が数多くあるが、大きな特徴は技術者の多くが退職

今、全国の地方都市にとって「まちづくり」をどう進めるか、は大きなテーマとなっている。しかし、それは決して国による画一的なまちづくりであってはならない。それぞれの都市の個性を發揮し、「生活して楽しい町」にしていくことが必要である。ヨーロッパには、ちょっとした路地裏に素晴らしい魅力スポットを備えた小さな町や村が少なくない。日本にも、東京で策定された国土計画による画一化の圧力に耐えて、独自の個性と魅力を保って

後も地元で生活していることだ。どうしてだろうか。実は、ロチェスターにはいいレストランや美術館、コンサート会場などがあり、大人が楽しめる町になっているのだ。つまり、生活して楽しい町だからこそ、多くの技術者たちは退職後も町に定住し、蓄積した知識や技術を生かして産業クラスターを形成しているのである。自分たちが楽しめる町をつくること、みんなに楽しんでもらえる町になる、このことをロチェスターは私たちに教えてくれる。ところで、私たちの倉敷市でも、住んで楽しい町をつかっていくという動きが活発になっている。それは、市民手づくりのイベントから始まった。その一つが、毎年十月に開催される「倉敷屏風祭り」である。倉敷には江戸時代、秋祭りの一つとして屏風祭があった。これは、町衆（地元の住民や商家など）が家の格子戸を外して自慢の屏風を飾り、多くの人たちに楽しんでもらうという祭りだった。これを二〇〇二（平成十四）年から市民が復活させた。それも、新しい観光の目玉にしよつなどといった考えではなく、自分たちで楽しもうと始めたのだ。お祭りを無理やり復活させたのではなく、市民の気持ちの中から自発的に生まれてきたお祭りである。今では毎年、約三千軒が格子戸を外して屏風を飾り、花を生け、行き交う人々をもてなしている。こうして自分たちのためのまちづくり

を進めることによって、倉敷の町に面白さを感じる若者たちも増えている。例えば、商店街に若者のチャレンジショップを開設したところ、六店舗が入居し、そのうち二店舗は、チャレンジショップを「卒業」し、実際に街中で開店するまでになった。また、産業づくりでも大きな力となっている。新しい産業を育成するためには豊富な経験や知識を持った人材が不可欠である。その点でも、倉敷の町を本当に好きになったトップクラスの技術者や開発者がわざわざ倉敷に住居を移し、産業づくりの力強い原動力になってくれている。自分たちにとって住んで楽しい町をつくることは、多くの人たちの魅力となり、新しいまちづくりの基盤となってくるのである。もし、これらの動きが成功しているとしたら、その原動力は、公共マインドを持った志高い市民と、シビルマインドを持った柔軟な行政スタッフ、それに美術館の館長や学芸員をはじめとするプロフェッショナルたちだった。彼らがともに語り合い、笑い合い、時には厳しい言葉をやり取りする中から、新しく面白いものが相次いで生まれてきた。これはもちろん、倉敷だけのことではない。この地でのささやかな体験が、中四国の各地に綺羅星のように並んでいる歴史と文化の薫り高い町々に、いささかも勇気と自信をもたらすことができればうれしく思う。

# 碧い風

季刊●あおいかぜ

VOL.56 / 2006 / MAY

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも変え、子どもたちにしっかりと手渡したい。

こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。

「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、

自分たちのまわりにある魅力を高め、

きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。

弱い風だが、楽しい風。

そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

## CONTENTS

page

羅針盤 3 大原謙一郎

特集 / スポーツで熱くなれ!! 4 スポーツが地域を「再生」する 二宮清純

8 海を越えるスポーツの心(岡山市)

10 サッカーボールで地域が燃える

13 地域で支える総合型スポーツクラブ(山口県岩国市由宇町)

14 市民の熱い心が支える広島東洋カーブ(広島市)

地域に生きる企業家群像%6 16 アスカネット社長・福田幸雄(広島市)

産学官連携最前線q 20 出雲土建・島根大学(島根県)

キラリ、輝く元気企業@9 22 日本ランドメタル(鳥取市)

[シリーズ]21世紀の産業をリードする企業団地 24 玉島ハーバーアイランド(岡山県倉敷市)

夢紡人[ゆめつむぎびと]%2 25 山田美那子(岡山県津山市)

CREATOR[クリエイター] 28 萩焼作家・三輪和彦(山口県萩市)

佳味彩々 29 三角餅(山口県柳井市)

庭園逍遙 30 足立美術館の庭園(島根県安来市)

工芸の旅 32 備中神楽面(岡山県西部)



表紙写真：『宍道湖干拓地を飛び立つ白鳥』  
川本真功(島根県松江市在住)  
1933年島根県生まれ。ハクチョウを県鳥としている島根県の松江市を拠点に、ハクチョウを最大のテーマとした写真作家活動を展開している。主な作品集に、『宍道湖、中海の白鳥』『白鳥』などがある。

表紙デザイン：須田勝男

写真：林田 悟(岡山市在住)



かつて山陰と京都を結んでいた旧山陰道の近くに広がる横尾の棚田  
(写真提供：鳥取県岩美町役場)

\* 本誌は古紙配合率100%再生紙を使用しています。

特集〇スポーツで熱くなれ!!

# スポーツが 地域を「再生」する

二宮清純

これからのスポーツ振興に必要なのは、  
地域の人たちがさまざまな形で参加できる  
地域密着型スポーツクラブである。  
それによって、地域コミュニティを再生し、  
地域を活性化していくことができる。



プロフィール  
にのみや・せいじゅん  
1960年愛媛県生まれ。スポーツジャーナリスト、株式会社スポーツコミュニケーションズ代表取締役、日本サッカーミュージアムアドバイザーボード委員。国内外で幅広い取材活動を展開するとともに、ラジオ、テレビなどでコメンテーターも務める。著書に、『勝者の思考法』『スポーツ名勝負物語』などがある。

写真：MIKE POWELL/アフロ・フォトエージェンシー



## 学校・企業中心の日本のスポーツ

テレビや新聞などで大きく取り上げられ、人々の関心や興味を集めているスポーツ。語源が「diaport（はしゃぐ・楽しむ）」であるように、もともとこの意味は娯楽や余暇、遊びである。

日本に欧米のスポーツが「輸入」されたのは明治時代になってからである。明治政府は欧米諸国に追いつくために富国強兵を国策としていた。そのため、スポーツを日本語に訳す時、「遊ぶ」ということを前面に打ち出すことができず、「体育」と訳してしまっ

たのではないかと推測される。それは、当時の時代状況を考慮すると間違った判断とはいえないまでも、本来の意味ではなかった。それ以来、スポーツは強靱な肉体をつくり、記録を競い合うものと理解され、スポーツを楽しむということとはほとんど軽視された。

そのため、日本でスポーツを中心的に行ってきたのは学校と企業であった。学校には野球部やテニス部といった運動部が、また、企業にもスポーツ団があり、それぞれ他校や他社の運動部、スポーツ団と強さを競い合ってきた。

## 本来の意味のスポーツを「再生」

このように、学校や企業を中心にスポーツが行われ、成果も得られたが、社会環境の変化などによって学校や企業中心のスポーツのあり方が大きく問われた。

学校では少子化の進展によって生徒数が減少し、運動部自体が成り立たなくなってきた。一方、企業でも、景気の低迷やリストラなどによって企業スポーツから撤退

するケースが続出するようになった。企業スポーツの目的はもともと福利厚生や社威発揚（はうぎょう）・広告・宣伝が中心であり、その費用対効果についても見方が厳しくなっている。したがって、その効果を発揮できなくなれば、企業スポーツから撤退せざるを得なくなっているのだ。しかし、これまでスポーツの中心であった学校や企業が厳しい状況を迎えたからといって、「公」のものであるスポーツの役割を終えるなどということは許されない。そのためにも、もつ一度スポーツの原点を振り返り、本来の意味でのスポーツを「再生」していくことが求められる。

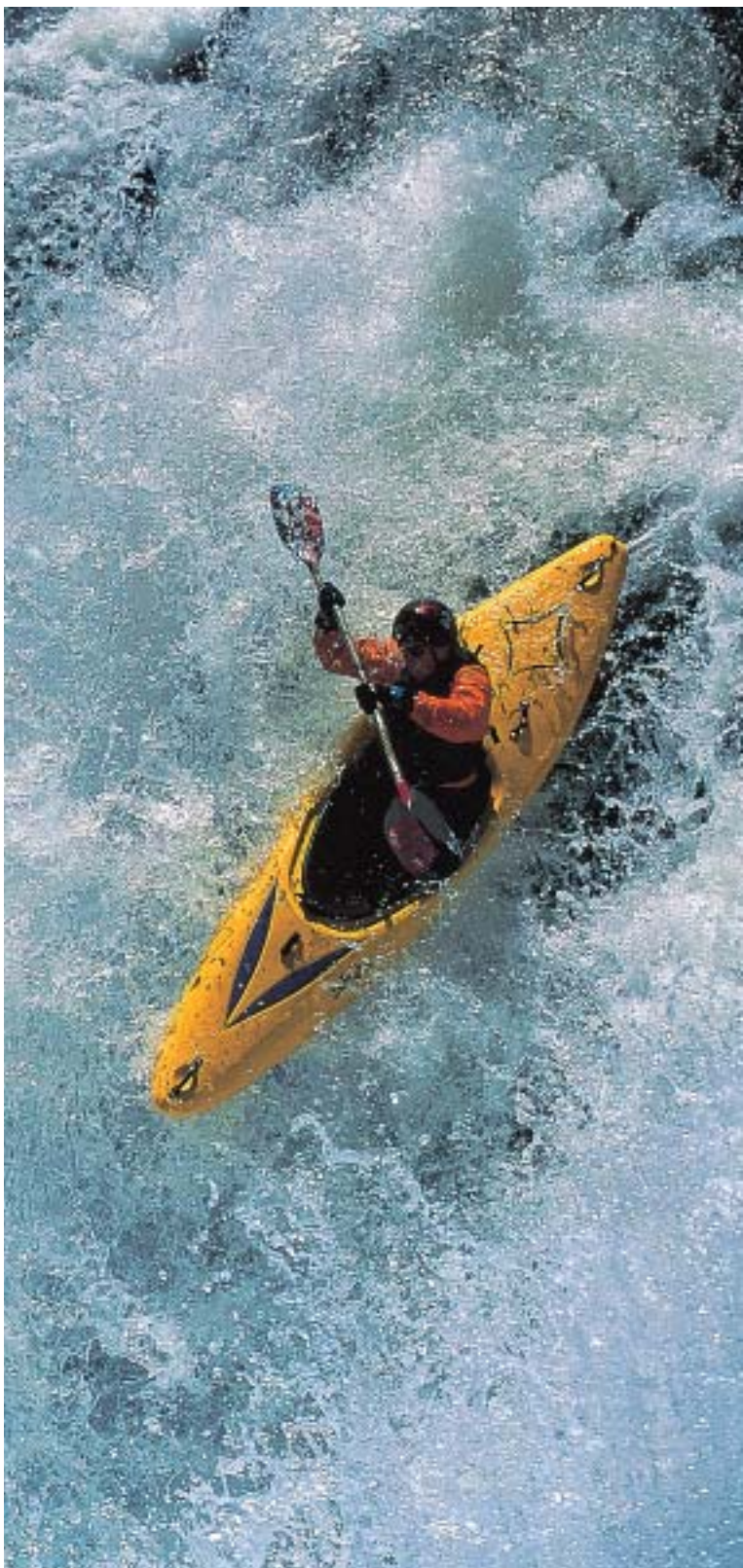
## 地域住民が参加できるスポーツクラブ

ヨーロッパの都市を歩いてみると分かるのだが、どんな小さな都市にも教会とオーケストラ、そしてスポーツクラブがある。これらは、その都市に暮らす人たちが住んで良かった、生まれて良かったと思える「心のインフラ」である。日本でインフラというと、道路やダムなどを思い浮かべるが、こうした心の支えとなるものも立派なインフラである。これからの時代は、こうした心のインフラをもっと充実させていくことが必要である。

ヨーロッパの都市にはスポーツクラブがあるといったが、私は日本にはスポーツチームはあってもスポーツクラブはこれまで存在しなかったと考えている。チームはあくまでも「集団」であり、目的を達成すると解散してしまふ。一方、クラブは「家庭」であり、解散することがない。

チームの目的は大会で優勝したり、記録を伸ばしたりすることだが、クラブの目的はスポーツを楽しむものである。地域密着型で地域や住民が豊かになるもの、「コミュニティ」の核になるものである。それは特定の選手たちのチームではなく、地域住民みんなが参加でき、みんなで支えるスポーツクラブである。

こうした地域密着型スポーツクラブこそ、これからの



日本のスポーツ振興には必要である。

### スポーツクラブは地域力を高める

地域密着型スポーツクラブの大きな力は、まず地域コミュニティの核になることだ。最近の社会事件でも顕在化しているように、地域コミュニティの崩壊は甚だしいものがある。かつては、顔を合わせることに言葉を交わし、時には留守番役も務めるなど、近所づきあいは深いものであった。しかし、最近では隣家の人と顔を合わせないことが一般的となり、地域の行事などに参加しない家族も急増している。

それもあって、一昔前なら想像できなかったような悲惨な事件が地域の中で発生するようになってきた。それは、ある意味では地域の犯罪抑止力が低下していることを示唆している。言葉を代えれば、地域力が衰退しているのだ。私は、スポーツはそうした地域社会の危機を救う可能性を秘めていると考えている。

スポーツの原点は地域のお祭りである。お祭りの時には、老若男女みんなが参加し、みこしを担いだり、お酒を飲んだり、法被を着たりして、地域一体でお祭りを盛り上げる。それが地域の文化を作り上げてきた。

地域密着型スポーツクラブも同じである。みこしを担ぐのが若者を中心とする「スポーツ選手」だとすれば、周りの人たちはユニフォームを作ったり、応援歌を作詞する。また、厚食を用意したり、大きな旗を振って応援する人もいる。

このように、元気な人だけでなく、地域の人たちがさまざまな形で参加できるのが地域密着型スポーツクラブである。こうしたスポーツを通じて、地域コミュニティは再生できるし、地域力も高めることができるのだ。

地域密着型スポーツクラブのメリットはそれだけではない。クラブチームは、自分たちの拠点だけでなく相手の拠点でも試合を行うことを原則としている。そのため、他のクラブチームの選手やサポーターたちが数多く自分たちの地域にやってくる。移動のために交通機関を

使用し、ホテルなどの宿泊施設も利用し、飲食店などで郷土料理を楽しむ。その結果、大きな経済効果ももたらすのである。

### 住民も自立する時代

このように地域密着型スポーツクラブは地域に大きな成果をもたらす可能性に満ちているが、その一方で、継続的に活動するためにはきちんとした運営が求められる。明確なビジョンを持ち、クラブマネージャーを選挙で選ぶなどの民主的なシステムがあり、しっかりしたりーダーがいることが必要だ。それとともに、安定的な財源の確保も欠かせない。

これまでのスポーツ振興においては、行政からの補助金や助成金などが大きな財源となっていた。しかし、行政サイドの財源も厳しくなっており、これまでのような補助などはできなくなっている。しかし、それ以上に大切なのは、住民が自分たちの力

で健康維持やスポーツの振興を図っていくことを考えることである。まさに、地方行政が自立の時代を迎えているように、住民も自立する時代を迎えているのである。

そのときに大きな力となるのは、これまでスポーツの中心であった学校や企業である。地域密着型スポーツクラブのために、学校は運動場を提供し、企業も資金をバックアップする。そして、地域に親しまれる学校、地域に愛される企業になれるのである。

### スポーツは地域のアイデンティティ

日本で地域密着型という理念を明確に掲げたのはJリーグ(日本プロフットボールリーグ)であった。そこで提案されたのは、企業はスポーツを「所有」することから「支援」することに方向を変え、公のものであるスポーツをみんなで支えようというものだった。

この理念は大きな成果を生み出している。企業名ではなく地域名をチーム名に掲げることで、チームをサポートする人たちは急増した。企業名が入ったチームであれば、親会社がライバル関係にある都合上、応援できなかった人も、地域名が入ったチームになることで応援できるようになった。まさに、スポーツが地域のアイデンティティとなったのである。

Jリーグ誕生のインパクトはそれだけではない。地方都市のあり方にも大きな示唆を与えている。新潟市をホームとするアルビレックス新潟はJリーグ設立の六年後に加盟したクラブチームである。加盟する前は、新潟にはサッカーファンなどいまいと云われ、チームも信濃川の河川敷で練習を重ねる「草サッカーチーム」だった。しかし、Jに昇格すると、平均四万人以上のファンがスタジアムで応援し、観客動員ナンバーワンにもなった。加盟する前は誰も成功を信じていなかったが、地域はサッカーチームを求めていたのである。これによって数億円という経済効果もたらされるとともに、アルビレックス新潟を応援するために、わざわざ首都圏から移り住む若者も増えているという。

### スポーツで地域に自信を持つ

明治以降、外国に追いつけ追い越せを目標としてきた日本は中央集権によって大きな成長を遂げてきた。しかし、これからの時代は地方に財源や権限をきちんと移譲し、地域が自分の足でしっかりと立っていかねばならない。

その前段階で特に重要となってくるのが地域アイデンティティの確立である。この町に生まれて良かったここに住むことが幸せだと、住民に思ってもらったことで大きな力となるのが地域密着型スポーツである。

地域密着型スポーツを通じて、住民たちは地域を愛する心を育み、自分たちの地域に誇りを持ち始める。そうすることで、いわゆる中央集権から地方分権へとといったパラダイムチェンジや地域経済の活性化が加速されると確信している。



\*パラダイムチェンジ：社会全体の枠組みの変動

株式会社スポーツコミュニケーションズ  
TEL03(5327)3824  
URL <http://www.ninomiyasports.com>



参加者と一緒にアンコールワットを走る有森さん

特集〇スポーツで熱くなれ!!

# 海を越えるスポーツの心

[岡山市]

長い内戦が続いたカンボジアで開かれたマラソン大会。それがきっかけとなって市民の手で設立されたNPOは、カンボジアの人づくりを支えるために、スポーツを通じた地道な活動を展開している。



スポーツを通じて子どもたちに笑顔が戻ってきた。

アンコールワットを走るメダリスト

三十年近くわたって内戦が続いたカンボジア。国民は内戦に疲れ果て、埋められた数百万発の地雷によって被害者が続出していった。

そんなカンボジアで初の国際スポーツイベント「アンコールワット国際ハーフマラソン」が開催されたのは一九九六（平成八）年だった。

地雷被害者の支援と地雷廃絶を世界にアピールするために開催された

大会には、十四カ国一地域から六百人を超えるランナーが参加した。アンコールワットのコースを走る参加者

の中に、オリンピックで二大会連続メダルの快挙を成し遂げた有森裕子さんの姿があった。有森さんはその年のアトランタオリンピックでメダルに輝いたこともあって、マラソン大会に招待されたのだった。

この大会の事務局は国連支援財団が引き受けていたが、さまざまな事情で継続することが難しくなってきた。そうした中で、有森さんは大会に参加したフオーク歌手の高石ともや氏やニュージールランドのマラソン選手であるロレン・モラー氏などと相談し、自分たちで大会を

継続していくことを決意した。

有森さんは岡山市の出身で、マラソン選手として記録の更新とメダルの獲得を目指してきた。それとともにマラソンを通じて培ってきたものを社会に還元したいという気持ちも抱き続けていた。その一環として、この大会を継続したいと考えたのだった。

有森さんたちの呼びかけは少しずつ広がり、第一回大会から二年後の一九九八（平成十）年には非政府組織「ハート・オブ・ゴールド」が設立された。ハート・オブ・ゴールドは、「スポーツを通じて、国境 人種



青少年へのスポーツの普及がカンボジアに明るさをもたらしている。

ンディキャップを超えて、希望と勇気の共有を実現することを目指す組織で、本部は岡山市にある。代表理事は有森さんが務めており、二〇〇一（平成十三）年にはNPO法人に認定されている。

カンボジアにスポーツを根付かせる

「多くの人たちの支援やハート・オブ・ゴールドの設立によって大会は継続され、昨年は十回目となりました。財源的には非常に厳しく、これからも多くの人たちの支援を仰がなければならぬと思います。でも、なんとか自分たちの力で継続し、世界から多くの人たちが参加する大会にしていきたいと思っています。」こう語るのはハート・オブ・ゴールドの田代邦子事務局長。事務局は個人の自宅、スタッフもボランティアといったように徹底的に経費を削減しながら運営している。

このマラソン大会とともに、ハート・オブ・ゴールドが力を注いでいるのが青少年・指導者の育成だ。カンボジアではスポーツや音楽といった情操教育はほとんどなされておらず、最初の大会を見つめる人たちの表情は硬く、応援する人もいなかった。しかし、大会を続ける中で、特に子どもたちの表情はとてつもなく笑顔に変わってきた。

そうした変化を感じ取ったハート・オブ・ゴールドは、二〇〇一（平成十三）年にマラソン大会と併せて「青少年・指導者育成スポーツ祭」を開催した。これはマラソン会場近くの運動場にバスケットやサッカー、バレーボールなどの施設を設置し、日本から派遣したスポーツ指導の専門家とともにスポーツに親しむものだ。

このスポーツ祭で特徴的なのは、青少年にスポーツを広めるだけでなく、指導者の育成にも注力していることである。「カンボジアでは学校教育の中に体育教育が確立されておらず、指導者も不足しています。そこで、スポーツを通して青少年教育を普及させるためには指導者を育成する必要があると考えたのです」と、田代事務局

長。

スポーツ祭は毎年会場を移しながら開催されており、カンボジア政府もその趣旨に注目して、三回目からは政府の認定行事にもなっている。

スポーツでパートナーシップを構築

「ハート・オブ・ゴールドが目指しているのは、カンボジアにスポーツ施設を整備するといったハード事業ではなく、人づくりというソフト事業です。先生たちが元気で、子どもたちも生き生きしている。そんなカンボジアになつてほしい。ソフト事業はなかなか形になってきませんし、時間もかかります。それでも、こここつとやっていきたいと思っています」と、田代事務局長は思いを語ってくれた。

そのために、カンボジア政府の依頼を受けて、JICA（国際協力事業団）と協力してハート・オブ・ゴールドは小学校体育科指導書の作成支援を始めた。カンボジアには十分な指導書はなかったし、運動場がいくつあるかも把握していなかった。そこで、日本の指導書をもとにして現地語の指導書を作成したり、大学の専門家を派遣してワークシヨップなどを開催しているのだ。

それ以外にも、カンボジアの人たちの自立に向けた日本語教室の開催や、孤児を対象とした里親制度、参加者や観客に百円の募金を呼びかけるチャリティー・スポーツ大会、大学生たちにカンボジアを理解してもらうために現地を訪れるスタディー・ツアーへの協力など、ハート・オブ・ゴールドはさまざまな取り組みを展開している。

そこに共通しているのは、スポーツによってカンボジアの人たちの心を育て、希望と勇気を与えるとともに、日本の人たちにも発展途上国を知り、かわり、自分たちの生活を振り返ってもらおうというものだ。それは、スポーツを通じたパートナーシップの構築であるともいえる。

特集〇スポーツで熱くなれ!!

# サッカーボールで 地域が燃える

ワールドカップに向けて高まるサッカー熱。  
多くの人たちの熱い声援を受けて勝利に向けて突き進むサッカークラブは、  
地域と一体となりながら、サッカーの新しい時代を築こうとしている。



激戦を繰り広げるSC鳥取

日本一の育成型チームを目指す  
サンフレッチェ広島

一九九三(平成五)年五月に全国十クラブでスタートしたJリーグ(日本フットボールリーグ)は、地域密着型クラブリーグとして、プロの選手による最高のプレーを提供しながら、次代を担う選手や子どもたちの育成も大きな目標として掲げている。そのリーグでスタート当初から中国地域唯一のチームとして活躍しているのが、広島市をホームタウンとする「サンフレッチェ広島FC」である。

広島県はこれまででも多くの名選手たちを輩出し、県内各地でもサッカーが活発に行われている。そうした環境の中で、サンフレッチェ広島FCが目指しているのが、市民・県民に愛される「日本一の育成型クラブ」だ。「そのために普及活動には積極的に取り組んでいます。私たちは、普及はサッカーだけでなく、スポーツの基盤をつくるうえで大切なものであると考えており、まず体を動かすのは楽しいということを一人でも多くの子どもたちに知ってもらいたいと思い、精力的に活動しています。」この説明してくれたのはサンフレッチェ広島FCの山出久男普及部長。

学校でのスポーツ活動が少なくなっている上に、公園などで走り回る子どもたちの姿もほとんど見なくなつた。そうした中で、最初からサッカーを普及しようとするのではなく、スポーツにかかわる人を一人でも増やせれば、それだけサッカーをやっていく子どもも増えてくるといふ考えである。

サンフレッチェ広島FCの主な普及活動としては巡回指導活動とスクール活動がある。

巡回指導活動は、広島市内や、ユース(プロ選手を目指す高校生のチーム)の拠点となっている安芸高田市内の小学校、幼稚園、保育園にコーチを派遣し、体を動かすことの楽しさを体験してもらうものだ。メニューを見

ると、鬼ごっこや跳び箱、ボール奪い競争などがあり、子どもたちは満面の笑みを浮かべて運動しているという。これらは、サッカーとは直接関係ないように思えるが、どれも対人動作などサッカーにつながる動きを含んでいる。

「年間で約六十回は定期的に行い、それ以外にも要望があれば行くようにしています」と、山出部長。

一方、スクール活動はサッカーをもっと楽しみたい、もっと上手になりたいと思っっている小中学生を対象としたもの。現在は県内外七カ所のスクールで合計約千人の選手が学んでおり、スクールからプロになった選手も生まれている。

「日本一の育成型クラブ」を目指すサンフレッチェ広島FCの取り組みは着実に成果をもたらしているようだ。

「地域発」をキーワードに挑戦する  
SC鳥取

日本サッカー協会のリーグ構成でJリーグの下に置かれている日本フットボールリーグ(JFL)は、Jリーグへの昇格を目指してのぎを削っている十八チームの一つが、鳥取県<sup>よなほ</sup>鳥取市をホームタウンとするSC鳥取である。

SC鳥取は一九八三(昭和五十八)年に設立された鳥取教員団チームを母体としている。教員団チームは団体優勝など輝かしい実績を残したが、教員以外の人も参加できるよつと、一九八九(平成元)年にクラブチーム・SC鳥取として再出発した。その後、中国リーグでの優勝などを経て、二〇〇一(平成十三)年に念願のJFLへの昇格を果たした。

「中国リーグまではすべて部費でまかなってききましたが、昇格とともに遠征費などの経費も増えてきたため、サポート会員やスポンサーを地元で募ることにしました。その結果、昇格した年には約四千人の方がサポート会員になってくれました。」この語るのはSC鳥取の廣崎圭事務局長。

SC鳥取

・TEL0859(37)3515

URL <http://www.sc.tottori.net>

株式会社サンフレッチェ広島FC

・TEL082(233)3233

URL <http://www.sanfrecce.co.jp>

株式会社鹿島アントラーズFC

・TEL0299(84)6808

URL <http://www.so-net.ne.jp/antlers>

写真：井上耕之介(鳥取市在住)



子どもたちに体を動かす楽しさを提供するサンフレッチェ広島の巡回指導活動(写真提供：サンフレッチェ広島)

# 地域で支える総合型スポーツクラブ

【山口県岩国市由宇町】



が、中学校運動部には生徒数の減少や顧問教師の異動、生徒が希望する種目を選べないといった問題が、それぞれあった。こうした問題を話し合っ中で、新たに総合型地域スポーツクラブを設立

し、多項目・多世代でスポーツをやっているというところになったのだ。こうして任意団体として誕生したのがゆづスポーツクラブで、設立三年目の二〇〇三(平成十五)年にはNPO法人格を取得した。

「現在の会員数は千八百四十三人で、小学校低学年の加入率は47・6%、高学年

水曜日午後一時半。JR山陽本線由宇駅にほど近い岩国市由宇町文化スポーツセンターのアリーナでは、地元のお母さんたちの元気な声が響いていた。マンモスというスポーツサークルによるソフトバレーボールだ。一方、ロビ

「スポーツクラブの設立によって、スポーツ少年団のコーチや地域で活躍される方を中学校の部活動の外部指導者として派遣することも可能になり、小中一貫の指導態勢を整えることができつつある」と、ゆづスポーツクラブ。

で68・8%となっており、加入率は県内トップです」と、ゆづスポーツクラブ。ゆづスポーツクラブには、専門部・スポーツ少年団以外にも、前述したマンモスのようなサークルが二十四あり、太極拳やフラダンスなど多彩な活動を展開している。

「ゆづスポーツクラブが設立されたのは二〇〇一(平成十三)年四月だった。翌年から学校週五日制が完全実施されることになり、体育協会と中学校運動部、スポーツ少年団関係者が学校での運動部活動の問題や地域スポーツのあり方などを協議したのがきっかけだった。そこではそれぞれの団体の活動状況や抱える問題点を話し合った。

「スポーツ少年団は小学一年生から参加でき、野球や卓球、柔道など十二種目がある。一方、スポーツ少年団は小学一年生から参加でき、野球や卓球、柔道など十二種目がある。現在の会員数は千八百四十三人で、小学校低学年の加入率は47・6%、高学年

「また、スポーツクラブでも、インディアカや幼児スポーツあそび教室、簡単ストレッチ、卓球デー独自の教室もあり、みなさんに喜んでもらっています。特に卓球デーなどは卓球台が足りないほど人気です」と、ゆづスポーツクラブ。卓球は必ず複数の人が集まらなければならないスポーツ。そのため、卓球をやりたいと思っても断念せざるを得ないことも多い。そこで、より多くの人に気軽に楽しんでもらえるように始めたのが卓球デーで、その日は一人でスポーツセンターに行っても、必ず相手が見つかるようになっている。



地元のサポートを受けながらJFLで活躍するSC鳥取  
写真：井上耕之介

現在は千人程度にまで減ってしまったが、これだけのサポート会員を擁しているクラブチームはJFLにはないという。SC鳥取は今でもサポート会員の募集に力を入れている。

人口も少ない鳥取県のクラブチームが多くサポート会員を集められたのは、なによりも地域のチームとして愛されているからだ。SC鳥取の選手たちは、昼間は会社で終業時間まで働き、夜間に練習している。したがって、会社や地元の人たちは、同僚や近くのお兄さんが選手として頑張っている姿を身近に見ており、応援してあげようという気持ちになってくるのだという。

「そういったバックグラウンドがあったからこそ、JFL参戦の決意にもつながっていきました」と、廣崎事務局長は語ってくれた。

「運営するために約三百人がスポーツボランティアに登録し、会場整理などに汗を流してくれました。まさに、地元との協力体制で運営してきたのです。だから、優勝

したことによって鹿島は全国区となり、地元の人たちも地域に誇りを持つようになりました。こう語るのは鹿島アントラーズFCの鈴木常務取締役である。地域との一体感を大切にしている鹿島アントラーズFCが基盤とするホームタウンの人口は周辺の市を含めても約二十八万人でしかない。そこで、小学生のジュニアから高校生ユースまで、一貫した指導体制のもとで、選手の個性や特性、感性を生かして、一人でも多くの素晴らしい選手を育てるようになっている。特に、高校生のユースでは、サンフレッチェ広島FCの取り組みを参考に、私立高校と提携してユースの選手は全員寮生活を送りながら技術の向上に励んでいる。その一方で、ユースに選ばれなかった選手の中には地元の高校に入学してサッカーを続けている人も多い。



鹿島アントラーズのホームグラウンド「カシマサッカースタジアム」  
(写真提供：オフィス・プリマベラ)

「二つとした活動を通じて、選手と子どもたち、さらには地域の人たちとのつながりを深めたいと思っています」と、廣崎さん。「地域発」をキーワードとしたSC鳥取は、地域の支えを受けながら常に挑戦し続けている。

## 地域との一体感で勝利をつかむ 鹿島アントラーズ

リーグ初代チャンピオンに輝いたのは鹿島アントラーズFC。そのホームタウンは茨城県鹿島町(現鹿嶋市)を中心とする近隣地域である。他の九クラブが大都市をホームタウンとしている中で、唯一町を基盤としたチームだった。

地域の人口も少なく、クラブの実力も低く評価されていた鹿島アントラーズの優勝は多くの関係者の驚きを呼び、「神話」とさえ呼ばれた。しかし、その背景には「リーグ加盟を一つの起爆剤として地域の発展を実現しよう」という住民や行政、企業の思いがあった。

加盟の方針が打ち出されると、茨城県は地域のための特別会計でスタジアムを建設し、地元の住民は著名活動で地域を歩き回り、地元自治体は手を携えてバックアップした。そして、母体となるサッカーチームを抱えていた住友金属はサッカー界のスーパースターであるジーコ選手(現日本代表チーム監督)を迎え入れ、一からのサッカークラブづくりに取り組んでいた。

「今年、その地元高校から鹿島アントラーズFCのブレイク選手になった人も出てきました。すぐ近くにユースの選手がいることは周辺の高校サッカー選手にも良い刺激となっているようで、高校総体などでも茨城県のチームはトップクラスになっています」と、鈴木常務。

## 地域に根ざし

たサッカーを表現しようとするアーティストは鹿島アントラーズFCの活動は、小さな地方都市の可能性を示唆するとともに、若者たちの力をフルに発揮させようとしているように思われる。

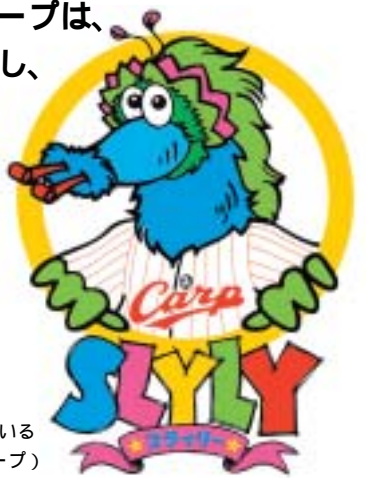


特集◎スポーツで熱くなれ!!

# 市民の熱い心が支える 広島東洋カープ

〔広島市〕

中国地域唯一のプロ野球球団・広島東洋カープ。  
 廃墟の中から立ち上がった市民を励ますために創設されたカープは、  
 多くの市民に支えられながら、地域との絆をさらに強くし、  
 栄光に向けた戦いに挑んでいる。



カープのマスコットとして親しまれている  
スライリー（提供：広島東洋カープ）

満員の野球ファンで埋まった広島市民球場  
（写真提供：中国新聞社（2005年9月26日））

## プロ野球で市民を励ましたい

一九五〇（昭和二十五）年二月十五日、二万人を超えるファンの祝福を受けながら「広島カープ」が産声をあげた。この日、現在の広島県庁付近にあった旧広島市民球場で結成披露式が挙行されたのである。

広島カープの文字が新聞に初めて登場したのは、その約三カ月前だった。原爆によって壊滅的な被害を受けた広島市。それでも人々は、廃墟の中から立ち上がり、平和都市・広島建設に向けて歩み始めていた。広島の人たちをなんとか元気づけたい。そう願い続けていた市民や地元企業などが着目したのがプロ野球だった。

戦後のプロ野球は隆盛の一途をたどっており、試合はいつも満員の盛況だった。特に広島県は「野球王国」といわれるほど野球が盛んで、数多くの名選手たちがプロ球界で活躍していた。それは「広島県出身者だけでチームつくれるんじゃないか」と言われるほどだった。

広島にプロ野球球団を設立しよう。そうした市民や地元企業の強い思いを受けて、一九四九（昭和二十四）年九月、地元を代表して三氏連名で広島野球倶楽部カープの創設が届けられた。翌日の中国新聞は、「在京各界の有識者がこころよく発起人として顔をそろえており、早くも種々の準備が進められている」と報じている。

## たる募金で支える市民球団

地元の熱い思いを背にした広島野球倶楽部カープであったが、球団運営は予想以上に厳しかった。結成された年から県などに出資を要請し、最初のシリーズが終了するまで、再建策の協議をしなければならなかった。

その危機を打破するために、後援会と市民は「たる募金」を開始し、選手の移動費などに充てていった。こうした地元の取り組みによって、それ以来、広島野球倶楽部カープは、市民が支える市民とともに野球を楽しむ「市民球団」と言われるようになった。

その後、一九五五（昭和三十）年には広島野球倶楽部カープを発展的に解消し、新たに財界を中心に株式会社広島東洋カープ（さらに、一九六七（昭和四十二）年には広島東洋カープに改称）を設立した。

以来、広島東洋カープは原爆ドームに近い広島市民球場をホームグラウンドに、熱戦を繰り返し、創設から二十六年後の一九七五（昭和五十）年には、「悲願のV1」の勝どきを高らかにあげた。



カープファンの応援でスタンドも赤く燃える。（写真提供：広島東洋カープ）

## チームも地域も「オール・イン」

このように広島東洋カープは誕生の時から地域との

なかりを大切にしてきたが、その一方で、二〇〇四（平成十六）年には球界再編問題や選手会のストライキなどが発生し、プロ野球のあり方そのものが問われるようになってきた。

「その中で、広島東洋カープは地元で健全な経営を行い、地域とのつながりをもっと深めていくのが使命だと考えました。そこで、昨年には地域担当部を新設し、地元の人たちの要望を聞いて、できるものは実現していくことになりました」と、地域担当部の関谷康部長は説明してくれた。

地域担当部がまず行ったのは、商標の無償使用と、選手やマスコミのスライリーの地域活動への参加だった。「カープのマークで街を飾りたい」といった声は以前から数多く寄せられていたが、今回の無償使用によって、カープのマークやチームカラーの赤色が各地で見られるようになった。また、カープ坊やのラッピングをしたタクシーや路面電車、ベロタクシー（自転車のタクシー）も街中を走るようになった。

一方、地域活動の参加では、五月に開催される「フワフワフェスティバル」や観光キャンペーン、商店街のお祭りなどに若手選手やスライリーが参加し、地域の人たちとのふれあいを深めている。

「マーティン・ブラウン新監督が自ら発案した今年のキヤッチフレーズは『オール・イン』です。ここには、チームは地域の代表として戦っているのであり、広島東洋カープもチーム、ファンが一体となって戦ってきたいという監督の強い思いが込められています。したがって私たちも地域との絆をもっと強くするために、できる限り、さまざまな取り組みを展開していきたいと思っております」と、関谷部長。

多くの人がたがたるの中に投じた浄財と熱い思い。それをチームの「遺伝子」とし、地域の代表として戦い続ける広島東洋カープ。

それは、これからのプロ野球の二つのあり方を示しているようだ。



文・**城市 創**（島根県益田市出身）  
写真・**長澤博幸**（広島市在住）

プロフィール  
ふくだ・ゆきお  
1948年広島市生まれ。服飾専門学校を卒業後、アパレルメーカーを経て、1983年に株式会社飛鳥写真館を設立。1995年に飛鳥写真館から事業部を独立させて株式会社アスカネットを設立し、社長に就任。アスカネットは、資本金は4億7,605万円、売上高は約23億円、従業員は約290人である。

## デジタル化で 新しい写真文化を創造する

株式会社アスカネット 社長 福田幸雄「広島市」

### 常識を否定して挑戦する

机の上に置かれた小さな写真集。その仕上がりをお細かくチェックする目はプロのカメラマンの目だった。一冊だけ刷られた写真集は、何百部、何千部刷るための試し刷りではない。一冊からの注文に因應するために刷られた「最終商品」となる写真集だ。そんな写真集など、これまでの常識ではありえなかった。しかし、お客さまのニーズに因應するためには、業界の常識を打破しなければならなかった。

まるで格闘するかのよう写真集に見入っていた企業家は、やがて顔を上げると、電話機に手を伸ばした。「だめだな。もっとクオリティを上げてくれ」。そう告げる。受話器の向こうの技術者から言葉が返ってきた。「そんな、無理です。常識ではこれが限界です」。言葉は殺気立っていた。「それでもやるんだ。常識など否定して、まったく違う発想で挑戦するんだ」

そう指示すると、企業家は椅子に腰を深く沈めた。技術者たちの苦闘ぶりは十二分に分かっていた。普通なら、「頑張ったよ。良い出来上がりじゃないか」と声を掛けたくなるほどだった。しかし、自分にはまだ満足できるものではなかった。自分が満足できないものをお客さまに提供することは、良心が許さなかった。まず、プロのカメラマンでもある自分が納得できる写真集にする。それが第一歩であると確信していた。

リテーターで制作する。それは、これまでの常識では考えられないことでした。しかし、私は必ずできると確信し、開発プロジェクトの先頭に立ち、技術者を、そして自分自身を鼓舞してきました。広島市内にある自社ビルの応接室で、企業家はほんの数年前のことを思い浮かべながら語った。株式会社アスカネットの福田幸雄社長（58歳）である。

### まるで夢のようだった起業と解散

福田社長は一九四八（昭和二十三）年に広島市で生まれた。高校を卒業後、大学に進学したが、二年生の時に中退して東京の服飾関係の専門学校に進んだ。当時は高田賢三やコシノジュンコといった若いファッションデザイナーが活躍し始めたころで、もともと芸術系をやりたいことがあったこともあって、福田社長は思い切ってファッションの世界に飛び込んだのだった。

それは大成功だった。専門学校卒業と同時に生地メーカーや縫製会社の応援を得てアパレルメーカーを開業。百貨店などに自社ブランドのコーナーを持つほどになった。

「まさに作れば売れる時代で、拡大路線をひた走りました。しかし、会社経営の経験などありませんでしたから、大量の在庫を抱えてしまい、結局解散することになりました。まるで夢のような五年間でしたね」

福田社長が広島市に帰ったのは一九八二（昭和五十七）年だった。東京での活躍ぶりを知っている



整然としたオフィスで写真の仕上がりをチェックする若い社員たち



高い質を実現した、1冊からの写真集（写真提供：アスカネット）

た地元のプティックなどから誘いもあったが、福田社長は苦労しても新しいことにチャレンジしたいという気持ちを抱いていた。

これだと思ったのは写真館だった。ファッションデザイナー時代から、福田社長はプロのカメラマンたちと親交を深め、写真技術も教わっていた。さらに、アパレル時代に在庫で苦しめられたこともあって、注文を受けて撮影する写真館には在庫がないことも大きな要因だった。福田社長はその年には飛鳥写真工芸社を設立し、翌年には株式会社飛鳥写真館として法人化した。

### 日本一の遺影写真のプロになる

写真館は開業したものの、問題はマーケティングだった。市内には数多くの写真館があり、他の写真館とは違うものがなければマーケットは開けない。そこで着目したのが、葬儀に欠かせない遺影写真だった。

葬儀の依頼を受けると、葬儀社はすぐに近くの写真館に遺影写真の制作を依頼する。しかし、暗室の中で小さな顔写真を切り貼りするのはつらい作業であり、積極的に受注しようという写真館はほとんどなかった。しかも、短時間で仕上げなければならぬため、出来上がりも粗雑なものが多かった。

「そこで、自分が日本一の遺影写真のプロになってやる」と考えたのです。それから三年間、葬儀社を歩き回り、遺影写真の技術を磨きながら、一日も休まずに遺影写真を制作しました。その甲斐も

あって、たくさんの方の葬儀社から信用を得ることができ、注文も増えてきました。

他の写真館が敬遠しがちな遺影写真というマーケットに焦点を絞った福田社長のビジネスは着実に成果を生み出していった。それとともに、結婚写真などの注文も寄せられるようになり、スタッフも少しずつ増やしていった。

### デジタル技術で全国ビジネスを展開

飛鳥写真館の事業が劇的に変わっていったのはパソコンが登場してからだった。当時、ほとんどの写真館はパソコンで写真を合成したり、修整できるなど考えていなかった。小学生のころにはアマチュア無線にも熱中した福田社長は、独学でパソコンを使った画像処理を学び、いち早く写真の合成や修整を手がけるようになった。

飛鳥写真館に頼めば写真をきれいに修整してくれる。そうした評判が写真の現像所などに伝わると、全国からデジタルでの合成や修整の注文が殺到するようになった。

その中でも、特に多いのが遺影写真だった。しかし、葬儀社には写真をデジタルで送信する装置などほとんどなかったし、操作できる人もほとんどいなかった。そこで、海外で開発されたばかりのリモートコントロール・システムを導入し、葬儀社などに設置してもらった。このシステムは、葬儀社は預かった写真を装置にセットするだけで、それ以降はアスカネットのオペレーターがリモートで操作し、三十分後には完成した遺影写真が葬

儀社で出力されるといったものだ。

「このシステムは好評で、しかも広島から遠い所でもビジネスが成立します。これによって地域ビジネスから全国ビジネスに成長することができました」

デジタル合成技術を習得したオペレーターが制作する遺影写真はクオリティも高く、このシステムはあっといふ間に全国の葬儀社に広まっていった。現在では全国約千二百社に導入され、全国シェアの20%を超える、年間約二十万枚の遺影写真が制作されている。

これほどのシェアを確保できるのはオペレーターの高い技術であり、その向上には相当な力を注いでいる。

### クオリティの高い個人写真集

福田社長のビジネスの原点は、他人が面倒くさがってやらないことをやることだ。そこから、遺影写真の通信出力というビジネスが生まれてきた。このビジネスはその後も順調に成長していったが、そうなることには挑戦しなくてはならなかった。

カメラマンでもある福田社長が次に考えたのが個人向けの写真集である。デジタルカメラが急速に普及する中で、結婚式や旅行などの思い出を高品質の写真集に出来ないだろうか考えたのだ。それも一冊からという小部数で、しかも安くかつ高品質の写真集というイメージだった。

それを実現するためには、業界の常識を打ち破



多くの人が訪れる東京・青山のショールーム（写真提供：アスカネット）

らなければならなかった。そこで、システム開発や印刷などの業者を探し出し、技術者集団を結成して開発に取り組んでいった。

しかし、満足できるクオリティはなかなか実現できず、苦闘の日々が続いた。それでも福田社長と技術者は夢を実現するために走り続け、やっと満足できる製品を生み出すことができた。

「満足できるクオリティになると、あっといふ間に注文が殺到してきました」と、福田社長。こうして誕生した個人向け写真集は、国内だけでなく海外でも普及し、現在では月間一冊以上が制作されている。

### 複合技術で世界を目指す

「私たちの技術は、それぞれの分野の優れた技術を組み合わせ、いわば複合技術です。それぞれの分野で高い技術を持っている企業はたくさんありますが、それらをトータルにコーディネートできる企業はそれほどありません。それが私たちの強さであり、新規参入を防ぐ障壁ともなっています。これからは、こうした技術や商品の素晴らしさをもっと広く知ってもらい、新しい写真文化を創造していきたい」

海外にもなかった、クオリティの高い個人写真集。その制作システムを確立した福田社長の目の先には海外がある。

葬儀用の遺影写真という、非常に限られた分野からスタートした写真館のビジネスは、デジタル化の波に乗って、世界に広がろうとしている。



# ちょうしつ 調湿木炭の機能を生かして マーケットを開拓

[ 島根県 ]

木炭をダイオキシンの吸着に使う研究に取り組んでいた島根大学と、  
廃木材のリサイクルを追求してきた出雲土建。  
両者のシーズとニーズは木炭の調湿機能でマッチし、  
新製品の開発へと発展していった。

## 建設リサイクルから木炭に着目

同緯度の国々の中では群を抜いて年間平均降水量が多い日本。その中でも、東北・北陸・山陰は年平均で高い湿度を示し、特に七月には80%を超える湿度となる。

その影響を大きく受けているのが住宅などの床下である。かつては通気性を良くするために床下を高くしていたが、現在は建築コスト削減の追求などにより床下が低くなり風通しが悪くなっている。そのため、床下の湿度は高い場合には95%にもなり、カビやシロアリが大発生しやすくなっている。

それを防ぐ建材として注目されてきたのが床下調湿木炭「炭八」で、開発を手がけたのは島根県出雲市に本社がある出雲土建株式会社である。

出雲土建は建設とともに解体工事を行っていたが、建設資材の再資源化を図る建設リサイクル法が施行されるのに伴って、解体工事から生まれる廃木材のリサイクル用途を研究していた。

全国各地の再資源化工場などを視察する中で着目したのが、リサイクルされた木炭だった。床下調湿木炭を製造している企業は全国各地に数多くあったが、マーケットはまだ伸び悩んでいた。

「住宅の床下に木炭を入れることが昔から行われていることを知り、カビやシロアリなど床下が抱えている問題を解決できればマーケットは大きいと思う、木炭製造の事業化に踏み切りました。」こう語るのは出雲土建の石

飛裕司社長である。石飛社長は、若い頃は住宅の水道や空調工事に携わっており、床下がカビだらけになっていたことも熟知していた。

いつでも現場を見てもらえる

床下の調湿に木炭が効果的であることは経験的に分かっている。それを科学的に評価・分析しなければ製品の信頼性は得られない。そこで島根県に相談した結果、紹介されたのが島根大学産学連携センターの北村寿宏教授だった。

北村教授はもとも製鉄会社の研究者、ダイオキシンなどを吸着する木炭の製造について研究しており、島根大学の教授になっても研究を続けていた。石飛社長はさつそく北村教授に依頼して共同研究をスタートさせた。「産学官連携を進めるためには、いつでも現場を見てもらえることが重要で、その意味でも地元と大学の連携が大切だと思いました」と、石飛社長は振り返る。出雲土建と島根大学の共同研究は着実に進み、共同研究がスタート（平成十四年一月）してから九月月後には特許を出願した。



建材ルートで販売されている「炭八」

出願した特許の内容は、調湿機能を引き出す木炭の製造技術と、そして床下調湿材の製品としての特許である。木炭に調湿機能があるとしても、どんな木炭でも機能を発揮するわけではなかった。実際、粉末にした木炭を袋詰めにした商品もあつ

たが、粉だけでは通気性が悪く、逆に湿気を溜め込んでしまい逆効果になっていた。そこで、北村教授の指導により、より高い調湿効果を得るための木炭の粒度と炭化製造条件を確立した。

さらに、チップ状の木炭を入れる袋についても、炭の粉が出て作業条件が悪いという従来品の課題を解決し、なおかつ透湿性の高い袋を使用するという内容で二〇〇六（平成十八）年一月には特許証書を受理した。

必要なのは全体のマネジメント

「今回の産学官連携が非常に早く進み、確実に成果を得られたのは、出雲土建の石飛社長自身が直接関わったことが非常に大きいと思います」と、北村教授。この際、産学官連携の基本は、何が必要か、そのためにどこと一緒にやっていくかである。したがって、事業を進めたいと思っている人が全体をマネジメントすることが最適であるからだ。

調湿木炭の製品化も例外ではない。これまで、木炭や調湿に関する各分野での研究は盛んに進められてきたにもかかわらず、用途を特定し、品質、能力を保証する建材製品としての確立が遅れてきたのは、これらの無数のノウハウ、研究成果をつなぎ合わせ、マネジメントを行うおつとする人間が少なかったためと考えられる。

「炭八」の場合、社長自らが研究・開発にかかわったことも大きい。共同研究を進める上で重要なのは、開発している製品のマーケットが大きく、そのニーズにマッチしているかどうかをスピーディーに判断することだ。判断する人がマーケットと消費者のニーズを深く追求しなければ、判断は遅れてしまい、結果的に他社に抜かれてしまつこともある。

調湿建材としての新しいマーケット

「調湿木炭は『炭八』の商品名で、関連会社の出雲カー



床下に敷き詰めることで快適な居住空間が得られる。写真提供：出雲土建

ボンから販売しています。それも、他社のようにホームセンターやネットでの販売ではなく、建材ルートを通じての販売です。これによって、住宅の新築やリフォームなどのマーケットに効率的に普及させることができました」と、石飛社長。

調湿木炭は住宅の調湿作用により新たな効果を発揮すると注目されている。その一つがダニやカビなどが重要な増悪因子の一つであるとされているアトピー性皮膚炎・小児気管支喘息などに対する効果である。湿度を適切に保つ調湿木炭はダニやカビの繁殖を少なくする効果がある。

アトピー性皮膚炎については、島根大学医学部の森田栄伸教授と共同研究を続けており、昨年開催された日本皮膚アレルギー学会では「住居への木炭敷設が有用である可能性が示された」という研究発表も行われている。

産学官連携から誕生した調湿木炭は、共同研究の展開によって、その用途とマーケットをさらに拡大しようとしている。



ホテルの会場案内にも使われているステンレス製品

# ステンレスの表現力に挑戦する 日本ランドメタル

「鳥取市」

高付加価値の製品を製造するために、  
培ってきた技術力で切り開いた「アートの世界」。  
そこには、「夢あるものづくり」というスリットと、  
培ってきた人のネットワークが大きな力を発揮している。

## 自社ブランドの開発に挑戦

ステンレスが持つクールな素材感を生かした、魅力的なディスプレイやモニュメント。そのメーカーとして、世界的なブランドショップなどからも注目されているのが、鳥取市に本社がある日本ランドメタル株式会社だ。

日本ランドメタルの前身は一九七二（昭和四十七）年に創業した吉村金属株式会社である。吉村金属は板金業を業務とし、ステンレスを加工した建築物の製造を手掛けていた。

高度経済成長期には順調に業績を伸ばしてきたが、バブル経済が終わりを告げ公共事業が減少するようになると、新しい活路を模索せざるを得なくなった。そうした中で、一九九九（平成十一）年に経営を任されたのが福嶋徳男社長であった。



千葉県松戸市の建立されている  
「二十世紀の感謝の碑モニュメント」も  
日本ランドメタルの製作である。



ものづくりの夢を語る福嶋専務  
写真：白根俊彦

福嶋社長は、二十年以上も前に吉村金属に入社して以来、総務や営業を担当していたが、「商品を作るためには現場を知らなければならぬ」と考えて、一年間製造の経験を積んでいた。その時に痛感したのが、「これからは付加価値の高い製品を作らなないと競争に勝てないということだった」。

福嶋社長は、これから成長するためには全国展開が必要であると考え、社名を日本ランドメタルに変更するとともに、自社ブランド、自社製品を開発できる企業を目標とした。注文された製品を作るのではなく、自分たちで新しい商品を開発し、それをお客さまにプレゼンテーションできる企業を目指したのである。

そのためマーケットは東京であり、マーケットを開拓する「武器」はステンレスの加工技術であった。しかし、ステンレス加工ならいくらでもメーカーはあった。日本ランドメタルの存在感をアピールするためには、他社にない「何か」が必要だった。

そこで着目したのが、ステンレスという素材を生かした表現であった。つまり、ステンレスを素材にしたアート作品を製

造しようと考えたのだ。しかも、美術品や工芸品で終わるのではなく、機能を持った製品を目指した。

目指すのは  
「夢あるものづくり」

日本ランドメタルの方向性は明確になってきたが、問題は製品づくりに取り組めるマンパワーだった。その当時の日本ランドメタルには、アパレルメーカーからの転職者も含めて六人の技術者がいた。福嶋社長は、自らの経験から、技術者は「夢あるものづくり」を目指していることを熟知していた。その気持ちを大切にするために、テーマを与えてステンレスを加工した作品づくりに取り組ませた。

「楽しみながらやってみなさい」という福嶋社長の言葉に後押しされたかのように、技術者たちは自由な発想で作品を作っていた。それは、これまでのステンレスのイメージを大きく塗り替えるようなユニークな作品だった。「遊び心を持った作品づくりは素晴らしい成果物を生み出しました。そこで、鳥取のホテルで作品の発表会を開いたところ、建築業界以外の人たちからも大きな反響がありました。」こう語るのは福嶋専務専務である。

日本ランドメタルはこれを起点として、二〇〇〇（平成十二）年にはアート部門である「アルファ事業部」を立ち上げ、本格的な事業展開をスタートさせた。アルファ事業部で大きな戦力となってい

るのは、福嶋専務をはじめとした女性である。金属というイメージでも男性のイメージがあるが、発想の転換から生まれたアルファ事業部を成長させるためには、もう一度発想を転換させて、女性中心に事業を展開しようと考えたのだ。

といっても販売チャネルがあるわけではなかった。そこで活用したのが、中国地域・ユーロビジネス協議会などで培ってきた人のネットワークだった。人から人に紹介されるたびに、福嶋専務たちはパンフレットを片手に紹介された企業に足を運び、作品のプレゼンテーションを行っていた。そつした地道な積み重ねによって、世界的なブランドショップなどからライスプリーの仕事が舞い込むようになった。

## 強みは意匠性の高さで高級感

日本ランドメタルの製品は、モニュメントやオブジェからインテリア家具、小物、花器などバラエティーに富んでいるが、そこに共通しているのは意匠性の高さで高級感だ。特に意匠性については、ほとんどのお客さまが、「ステンレスをここまで曲げられるのか」と驚くという。その後で、「こんなことはできないか」という相談を受けることもたびたびだ。また、設計段階から提案できることも

大きな強みになっていきます」と、福嶋専務。というのも、長年ゼネコンの下で建築物を製造してきたために、ゼネコンからのさまざまな要望に応えることができ、しかも作図もできることは大きな強さとなっているのだ。

「クライアントのニーズは高まってきており、他社にはない製品を開発することがますます求められています。しかし、作品を多くの人たちに見てもらうことで、もっと挑戦しようという気持ちになります。私たちのスローガンは『未来の夢を形に作る』です。大きなものから小さなものまで、心を込めて作らせてもらおうと考えていますし、そつした作品を誇りにしたいと思えます」と、福嶋専務は笑顔で語った。

ブランドショップやパートの化粧品ブースなどではアート性を追求するために、非常に凝ったディスプレイが増加している。こうした流れの中で日本ランドメタルの開発力はさらに大きな力を発揮しようとしている。



# 地元で根ざした物語を紡ぎ続ける 山田美那子さん

ふるさとにこだわり、地域の歴史と女性を掘り起こし続ける劇作家。  
わが子を喜ばせるために作った絵本が創作活動への扉を開き、  
地域の人たちの手による市民ミュージカルとなって、ふるさとの歴史を未来へとつなげている。

夢  
紡  
人  
「めももむきむた」%2

文・鈴木富美子（岡山市在住）  
写真・林田悟

## 郷土の偉人をミュージカルに

歴史の面影を色濃く残す、旧出雲街道沿いの町並み。肌寒さの中にもかすかに春の兆しを感じられるこの日、私は、古い町並みはすれにある、赤レンガ造りの小さな資料館の前に立っていた。

岡山県北部の中核都市・津山市にある津山洋学資料館は、幕末から明治にかけて活躍した津山出身の蘭学者・算作阮甫らの資料を展示している。阮甫は、今では歴史と文化・学問の町として知られるこの地の礎を築いた郷土の偉人だ。

そんな阮甫と家族の物語がミュージカル「チューリップ咲いた」となって、やはりこの地で九十年の歴史を持つ美作大学の新体育館こけら落とし企画として、三月半ばに上演された。演じたのは地元劇団に合唱団、学生や教職員ら。そして作ったのは、この地で生まれ、この地で暮らす劇作家の山田美那子さん（68歳）だ。

このころ岡山県内外で、山田さんが作った市民ミュージカルの上演が続く。二〇〇四（平成十六）年の津山城築城四百年記念事業「みんなのミュージカル」石の記憶や、今年に入ってからは旧勝北町が津山市と合併する前の一九九九（平成十一）年から取り組むミュージカル「黒媛物語」を上演した。

## プロフィール やまだ・みなこ

1937年岡山県生まれ。高校卒業後、児童文学を作家の早船ちよ氏に師事。ミュージカル、オペラ、演劇の台本づくりや作詞などを手がけるほか、絵本、童話、挿絵やイラストの制作、童歌の収集など活動は多岐にわたる。主な作品に、岡山城築城四百年記念市民ミュージカル「碧き流れのほとりに」、演劇「谷間の桜～石井十次をささえた炭谷小梅物語」ほか多数。



シリーズ・21世紀の産業をリードする企業団地

日本の産業を支える  
大動脈、瀬戸内海に面した大型企業団地

# 玉島ハーバーアイランド

（岡山県倉敷市玉島）

## <特徴>

- ①重要港湾・水島港に広がる245haの用地
- ②整備された港湾施設（水深7.5m岸壁・4バース供用中、水深10m岸壁・2バース供用中）
- ③便利な交通網  
JR山陽新幹線新倉敷駅から8km・12分、岡山空港から47km・40分、  
山陽自動車道玉島ICから11km・15分、瀬戸中央自動車道水島ICから16km・25分、国道2号から7km10分
- ④充実した優遇措置  
企業立地促進奨励金（限度額5億円） 物流施設誘致促進助成金（限度額3億円）  
大規模分譲促進補助金（土地代の20～40%を補助）  
大規模工場立地促進補助金（設備補助金の限度額50億円、土地補助金の限度額20億円）

お問い合わせ先  
岡山県産業労働部企業立地・物流推進課  
TEL:086(226)7374  
URL <http://www.pref.okayama.jp/sangyo/kibutsu/kigyo.htm>

年内には、既甫にちなんだ「維新の道」さらには岡山県の芸術祭でライト兄弟より先に空を飛んだ岡山生まれの「鳥人幸吉」生誕二百五十年を記念した新作オペラ「風の嬉遊曲」など、あと二本の上演が予定されている。

「テーマは「實」で地域に根ざしたものだ。もっと言うなら、私自身が生まれ育った津山一帯、美作地方に端を発したものです。そして必ず女性に焦点を絞っています」と山田さん。既甫の物語も、実は既甫の四人の娘たちにスポットを当てている。

### わが子のための絵本作りが原点

山田さんは一九三七（昭和十二）年生まれ、地元高校を卒業後就職し結婚。書き始めたのは長女を出産して、わが子に手作りの絵本を与えたかったからだといふ。

「子どもに似合ったペーパーやワンピースを作るように、私は長女に似合った絵本を作って、喜ばせたかっただけなんです」

そうやって初めて手がけた作品で、長女が麻疹にかかったのを機に書いた絵本「はしかおに」が児童文学関係の賞を受賞。これがきっかけとなって、のちに師事する「キューポラのある街」の作者・早船ちよびさんに出会う。



美作地方の昔話をもとにしたカレンダー

女性や子どもの視点から見ると、  
誰にでも分かってもらえる物語が書けるんですよ



福井県での国民文化祭で上演されたミュージカル「石の記憶」  
（写真提供：山田美那子）

「私の出発点は児童文学であり、今は女性に焦点を当てた書き方をしています。女性や子どもの視点から見ると、誰にでも分かってもらえる物語が書けるんです」

その後、長男、次女を出産し、三人の子育てをしながら、二十代から三十代にかけては、独学で絵を描き、絵本や童話、紙芝居などを作る。会社を辞め、夫の手がける電気工事業を手伝うようになってからは、イラスト制作や本の挿絵、作詞など、依頼があれば何でも引き受けた。その結果、五十代になってから、演劇や、地元音楽大学を巻き込んだオペラやミュージカルへと創作活動が進展していったといふ。

### ふるさとをいじりしさを求め、伝える

山田さんが書き続けたのは「津山のこと」。

「私は」じか知らないから。」「こで生まれ、きつこで死んでいく。好きでも嫌いでもない、でも私の知っている津山、私の感じた津山しか書けないから」

この原点をそのままに、津山を含め美作地方の昔話や民話、伝承を、なるべく津山の言葉で絵もつけてカレンダーやカルタにしたり、大学などと連携しながら童歌を収集して譜面を起し、絵入りで残したりする活動などにも取り組む。

津山の人間の物語を  
次世代の子どもたちに伝えていきたい



既甫のレリーフを見つめる山田さん

文：すずき・ふみこ  
1964年岡山市生まれ。大学院修了後、教師、出版社勤務などを経て、現在はフリーライター。福祉、環境、教育など幅広いテーマで取材・執筆を続けている。

「地域独自のものがどんどん消えていく中で、先人たちの足跡、津山の人間の物語を次世代の子どもたちに伝えていきたい。ふるさとがふるさとでいられる今のうちに」

ふるさとをいじりしさを追求する発想はまちづくりにもつながり、今では地域の行事としてすっかり定着した「津山納涼」なごまつり」や「津山城東むかし町」など地元の三つの祭りもプロデュース。そのことで大学に招かれ、まちづくりについて話したこともある。

### 地域を軸に未来に向けて物語を紡ぐ

地域の物語、地域の歴史に埋もれた女性を掘り起こすため、美作地方をくまなく歩き回り、郷土史をひもとく。調べ歩くため自ら「歩く会」を組織してもう二十五年になる。史料で見つけた、たった一行の記述から「この女性のことを書こう」と思ったら、関連の場所に何度も通って、同じ場の空気を吸い、同じ山や空を見て帰り、一気に物語を紡ぎ出す。

今、キリシタン禁教の時代の女性、法然上人の母など、美作地方の十二人の女性が、山田さんの頭を占める。中でも、強い思い入れを持ち、すでにミュージカルとなって高い評価を受けているのが「出雲阿国」だ。二〇一〇（平成二十二年）に岡山で開かれる国民文化祭に向け、出雲街道沿いの中心都市である津山・米子・出雲音吉市が連携して芸術文化事業を推進する機運が高まっており、そんな動きの象徴として「阿国を何がなんでも上演したい」と山田さんは意気込む。

一緒にミュージカルや演劇を作り上げていく中で触れ合う子どもたちには大きな可能性を感じるという。

「地域の歴史を子どもたちに教えないから知らないだけ。子どもたちの感受性と表現力はすごい。その意味で、私は未来をまったく悲観していません」

これからも津山にこだわり、美作地方の女性を掘り起こしていく。地域の歴史の中で、地域に軸足を置き、過去から未来へと物語を紡いで受け渡していくという。

いろいろな話をしながら津山洋学資料館へと案内してくれた山田さんに、柔らかな日差しを浴びた既甫のレリーフが一瞬微笑みかけているように見えた春の午後だった。



萩焼作家  
みわ かず ひ こ  
**三輪和彦**  
(1951年山口県萩市生まれ)

人間国宝を輩出した陶家に生まれ、幼い時から焼物中心の生活を送ってきた少年。その心を大きく揺さぶったのは、米國陶芸界の巨匠で、「カリフォルニアのピカソ」といわれるビーター・ボークスの作品だった。これまで見たことのない、鮮烈な作品。その強烈な衝撃に突き動かされるかのようについに、三輪は米國・サンフランシスコに渡った。二十四歳の時だった。ベトナム戦争が終焉し、あらゆる価値観が音を立てて崩れ去っていく時代。それはあまりにも刺激的だった。と同時に、帰国した三輪を苦しめることになった。自分は何を表現すれば良いのか。三輪の苦悶は続いた。それを打ち破ったのは、山口県立美術館が企画したシリーズ展「今、大きなやきものに何が見えるか」だった。「何をやってもいい」という主催者の言葉に励まされるかのように、三輪は意欲的な大作を発表した。それは、自分を表現できる「場」を見出した喜びに満ちているようだった。

以来、三輪は日本を活動の場とし、「恒久破壊」、「夢想の地」など次々にダイナミックな発想による作品を発表し続けている。そうした作品の一貫したテーマが、土の持つエネルギーをどう表現するかということだ。

そのために、三輪は常に土と対峙し、格闘し続ける。時には、フォークリフトで長い鋼の歯を打ち下ろして、造形する。それはまさに、屈強な土に正面から切り込む「戦い」である。

「長い歴史を持つ萩焼ですが、昔の作品を見つめると、この時代にこんな表現をしていたのかと驚かされることがあります。それこそ、常に時代の最先端を追い求めてきた萩焼作家の精神であり、その積み重ねこそが伝統だと思います。」

そうした積み重ねによって培われてきた伝統の上に立ちながら、それでも先端を追い求めていく萩焼作家。その一翼を担う三輪は、一体百千口以上の土と戦いながら、今も時代の先端を表現し続けている。



写真：村上征雄（山口県防府市在住）

佳味彩々  
**三角餅**  
みかどもち  
「山口県柳井市」

「三角餅」という名前だから、もちろん餅は三角形である。さらに、九個の餅が整然と並ぶパッケージも三角形だ。ここまで徹すると、お見事というしかない。

ところで、いつも口に入っている餅は丸いのに、どうしてこの餅は三角形なのだろうか。そのことを友人たちとの酒席で口にしてみると、往年の文学青年から「それは独歩センセイの『置土産』という作品に書かれているはずだ」という返答。

早速、独歩センセイこと国木田独歩の「置土産」を図書館で読んでみると、さすが明治の文豪たちの作品はほとんど読んだというだけあって、ありました。しかも、書き出しで紹介されている。「文学作品は原文のままでも読むべし」と唱える文学青年には申し訳ないが、意識してみると次のようになる。

「餅は丸いのが普通なのに、わざと三角にしているのはお客さんの目を引くことを考えたように思えるが、そうではない。餡を包みやすいように工夫したものだ。この三角餅の名前はいつしか広く知られるようになり、小さな茶店は繁盛していた。」

なるほど、餅で餡を包むには、丸めるよりは三角に折って包んだほうが速い。生産性を上げるために三角形にしたのだ。三角餅が考案されたのは江戸時代の文化年間（十九世紀初頭）といわれているが、その時代でも企業家たちは生産性の向上を追求してやまなかったたのである。

独歩は千葉県生まれながら、裁判官だった父親の赴任先を転々とし、広島県や山口県などで少年時代を過ごした。「置土産」は柳井市に滞在していたときのことを回想した作品で、登場人物のモデルも滞在先の人たちであるといわれている。ところで、どうして「ミカドもち」と読むのだろうか。調べてみると、文化年間に考案された当初は「サンカクモチ」と呼んでいた。明治時代に、試食して感動した天皇家ゆかりの人から「帝餅」と記された看板を贈与され、それ以来、「ミカドもち」と呼ぶようになったそう。

モチ米を材料とした衣は白色で、水飴や砂糖などで味がつけられ、中には小豆の餡が入っている。口に含むと、舌の先でとろけ、やがて庶民的な甘さが口の中で広がっていく。



写真：藤田良雄（山口県宇部市出身）

# 庭園逍遙

## 足立美術館の

# 庭園

「島根県安来市」

### 日本画とマッチした庭園

JR山陰本線の安来駅から無料のシャトルバスで約二十分。小高い山に囲まれた田園地帯の中にあるのが足立美術館である。足立美術館は、地元で生まれた事業家・足立全康氏（故人）によって一九七〇（昭和四十五）年に創設された。近代日本画の巨匠のコレクションで知られており、特に大きな足跡を刻んだ横山大観の作品を数多く所蔵していることから「大観美術館」とも呼ばれている。

横山大観のコレクションとともに、足立美術館が日本だけでなく世界で知られているのが、その日本庭園である。足立全康氏は若いころから絵を描くことと庭を見るのが好きであった。そのため、足立美術館を創設するときも、来館者に絵画を鑑賞してもらっただけでなく、日本画とマッチした日本庭園を楽しんでもらおうと考えていた。

創設当初の足立美術館は、今と比べると小さな規模であったが、開館から数年の歳月をかけて少しずつ大きくしていった。調和美の世界が広がり、絵画を楽しみながら歩を進めるたびに、新しい感動が来館者を包むようになっていった。

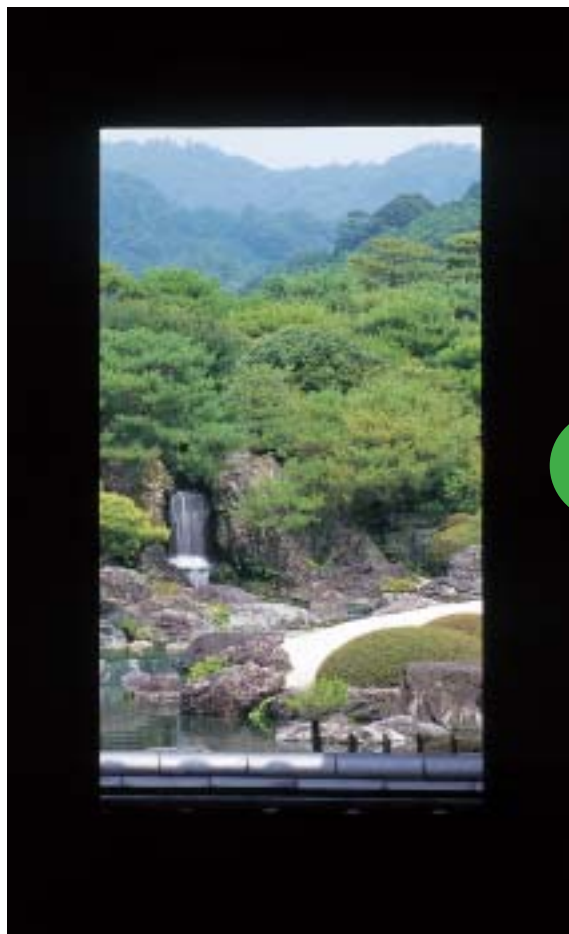
「足立全康が目指したのは、わびやさびを大切に京都などの庭園とは異なる、明るいつ庭園でした。そのため、造園で一般的なクロマツではなく、幹の赤が美しく、明るい印象のアカマツを植えました。また、大まかな庭園の設計は専門家に委託したのですが、完成すると自ら手を加えて、庭木や石の配置などを変更しました」と、武田氏。

足立全康氏が常に大切にしていたのは来館者に楽しんでもらうことだった。そのため、マツや石の配置にしても、一定方向からしか絵にならないことには満足できなかった。したがって、どの方向から見ても「一幅の絵画」として楽しめるように、配置が終わった後でも、わざわざ手を加えていたのである。

また、来館者の気持ちを大切にするために、来館者に混じって館内を回り、生の声に耳を傾けた。そして、できるものはすぐに実行した。例えば、「背景の山に滝があると、もっと美しいね」という感想を聞くと、高さ十五メートルの人工滝を開瀑した（亀鶴の滝）。また、「床の間越しに庭が見てみたい」という声を耳にすると、床の間の壁をくりぬいて、あたかも一幅の山水画が掛かっているかのようにした（生の掛軸）。

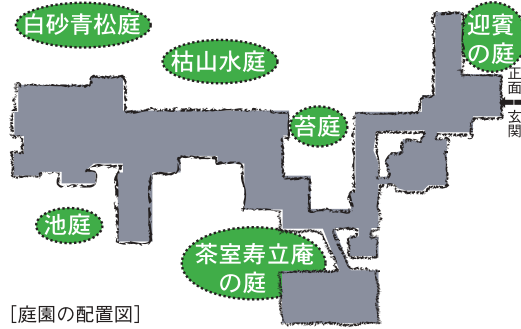
### 二年連続で「庭園日本一」

文字どおり心血を注いで庭園を築き上



床の間の壁をくりぬいた「生の掛軸」

来館者たちに楽しんでもらおうと、「一幅の絵画」のような庭園を実現した足立美術館。その庭園は、創設者の熱い思いと、それを受け継いだスタッフの地道な活動によって、今もなお進化し続けている。



【庭園の配置図】

人工滝を借景とした白砂青松庭 写真提供：足立美術館



た。「足立全康がいつも言っていたのは、次に来館したときに変化がなければお客さまは楽しめないということでした」。こう説明してくれたのは、財団法人足立美術館広報担当の武田 巨氏である。美術館であるから、企画展ごとに展示される作品は変わるが、それとともに日本庭園の四季の変化も楽しんでもらおうと考えたのだ。

### 来館者の生の声を大切に

足立美術館の庭園は建物をぐるりと囲んで広がっており、庭園の面積だけで約一万三千坪にもなる。

庭園は、来館者を迎える迎賓の庭、桂離宮の松琴亭を模して造った茶室寿立庵の庭、杉苔とアカマツや白砂のコントラストが美しい苔庭、美術館を囲む山々の稜線を背景に広がる枯山水庭、湧水の中を悠々とコイが群れる池庭、横山大観の絵画をイメージした白砂青松庭の六つの庭で構成されている。

玄関に一歩足を踏み入れた時から、目の前には大庭園と借景の山々が織りなす。また、こまめに剪定していても、庭木は生き物であるため、わずかずつではあるが大きくなり、次第に石や周囲とのバランスが崩れてしまふ。それを防ぐために、仮植場には常にスペアの木を植えておき、庭園の木が生長すると後方に移動し、代わりにちようど良い大きさのスペアの木を配置する。

こうした庭園の維持管理や庭園の質、建物との調和、来館者へのサービスの充実には日本だけでなく、世界でも高く評価されている。米国の日本庭園専門誌「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング」は毎年日本庭園ランキングを発表しているが、足立美術館の庭園は二〇〇三（平成十五）年から二年連続で「庭園日本一」に選ばれている。

このランキングは日本・米国・オーストラリアの庭園の専門家が全国約七百万所の候補地から選ぶもので、特に庭園の維持管理は「造園の大傑作」とであると評価されている。

常に、来館者に新しい感動を提供したい。それを実行し続けてきた足立全康氏と、その思いを今もなお実現し続けている足立美術館。そこに広がる日本庭園は「一幅の絵画」のような庭園であるとともに、進化し続ける庭園でもある。



びっちゅうかくら  
備中神楽面  
(岡山県西部)

備中神楽は、収穫を終えた秋の夜、  
来年の豊作を祈願して夜が明けるまで舞い続ける神楽である。  
日本神話を題材にした幽玄な舞いを際立たせているのが、  
多彩な備中神楽面である。  
面の放つ神秘性は、多くの人たちに親しまれ、  
今もなお受け継がれている。

写真：藤田良雄